

学 外 研 修 報 告 書

私は、学外研修員として出張しておりましたが、このたび研修を終えて帰任いたしました。
つきましては、次のとおりご報告申し上げます。

報 告 日	2025 年 5 月 20 日	所 属	国際関係法学科
職 名	教授	氏 名	岡垣 知子 
研修種別	☐ 1. 海 外 ☐ 2. 国 内	研修種類	☐ 1. 長 期 ☐ 2. 短 期
研修期間	2024 年 3 月  日 ~ 2025 年 3 月  日		
学外における主な研修機関および訪問先 オックスフォード大学 政治・国際関係学部 (2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 30 日) オックスフォード大学 エキセター・カレッジ (2024 年 10 月 17 日～2025 年 3 月 30 日)			
出張目的または研究題目 国際政治思想史の中のリアリズム			
資 格	☐ 1. 2023 年度獨協大学学外研修員 (派遣) ☐ 2. 本学承認の学外研修員 (自費等) ☐ 3. その他 ()		
大学から支給された費用 (要清算書類)・補助金額		300 万円	
研修内容 (1. 研修経過の詳細 2. 研究成果発表の予定 3. その他 を記入)			
1. 研修経過の詳細 アメリカと並んで国際政治学の双璧をなすイギリスの国際政治学の伝統、とりわけ「英国学派」と呼ばれるリアリズムの一派の源流および今日におけるその研究動向を中心に研究活動を行った。オックスフォード大学は第一次世界大戦後、国際政治学の講座が設けられた最初の大学の一つであり、歴史や哲学に重きを置くアプローチに特徴がある。政治学の一分野としての国際政治学のディシプリンにこだわるアメリカの国際			

提出先：所属学部長→学長→人事課

裏面につづく

政治学と異なり、イギリスの国際政治学は、「国際関係論」と呼ばれていることからわかるように、社会科学の色彩は弱く、学際性 (interdisciplinarity) を重んじる伝統がある。国際法や国際社会論で著名なアンドルー・ハレル教授にアカデミック・ホストになっていただき、学部の客員研究者用のエリアに設けられた専用のデスクスペースを使って研究に従事した。

オックスフォード大学は 12 世紀に設立された世界で 2 番目に古い大学であり、39 のカレッジからなっている。神学者たちが学ぶ生活共同体として発展した伝統が色濃く残り、それぞれのカレッジに図書館、ダイニング・ホール、チャペル、学生寮が設けられ、独立した運営が行われている。カレッジが学生や研究者たちの古くからの共同生活の場とすれば、「学部」は比較的新しい組織であり、学問の場である。3 学期制で、それぞれ 8 週間の長さの学期の間にありとあらゆる活動（授業のみならず、~~チャ~~チャペルでの礼拝、セミナー、カレッジの催し、課外活動等）が行われるので、学期中は学生も教員も多忙だが、学期と学期の間の休みも長い。研究者にとってはこの休みが論文執筆等の研究活動の書き入れ時になる。

学外研修の醍醐味の一つは、所属大学の授業に参加して学問の基礎を学び直し、新しい知見を得ることであるが、イギリスに到着して最初の学期 (Trinity Term) は学生の試験中心で、授業がほとんど行われていないのが残念であった。一方、充実した図書館システムをフルに活用して、研究の遅れを取り戻せたのは有意義であった。

アカデミック・イヤーの始まりである秋学期 (Michaelmas Term) になると、やっと大学らしい活動がフル回転し始めたので、大学のサイトに掲載される授業一覧に従って、国際関係論、国際安全保障、政治思想、社会学理論、国際経済史他の授業を聴講し、克明にノートをとった。インターアクティブな授業はほとんどなく、一方的に講師がしゃべる形態（原稿読み上げの講義もかなりあった）で、出席も取らず、学生の遅刻や途中退出を教員が気にする様子がないのは意外に感じた。講義の終わりに、講義の良しあしにかかわらず、毎回学生が拍手するのも奇妙な慣行に思えた。

学部所属の同僚の客員研究員が、オックスフォード大学に来たからにはカレッジに所属することが重要だと強く勧めてくれたのがきっかけで、セミナーで知り合ったエキセター・カレッジの学長にアカデミック・ホストになっていただき、10 月半ばよりそのカレッジの

メンバーになることができた。カレッジに所属し、そのスタッフや教員、イギリスの他世界各地から集まっている客員研究員と食事を日々一緒にすることで、中世から発展してきたこの特殊な大学システムの運営の仕組みやイギリスの大学が抱えている問題、近年の大学教育の動向などについて多くを学び、心温まる交流ができたのは、貴重な経験であった。

2. 研究成果発表の予定

1) 「英国学派」の国際関係論の近年の研究動向

歴史研究に重きを置く穏健なリアリズム理論である「英国学派」については、アカデミック・ホストのハレル教授やクライスト・チャーチ・カレッジのエドワード・キーン教授から多くの示唆をいただき、図書館での資料収集や関連のセミナーを通して近年の主要な研究成果に触れることができた。「英国学派」は、理論的には近年さほど大きな進展はないが、環境問題やフェミニズム、非ヨーロッパ地域に存在した過去の国際社会についてのケース・スタディーに応用される傾向が強くなっていることが分かった。

なお、英国学派の原点を探るうえで必須のヘッドリー・ブルのアーカイブを、貴重書が所蔵されているウェストン・ライブラリーで閲覧する予定であったが、昨今厳格になった個人情報規制に沿った分類・整理がまだなされていないという理由で、閲覧することができなかった。アクセス可能になった段階で司書が連絡をくれることになっているので、その際にブル・アーカイブの調査を行ったうえで論文にまとめたいと思う。

2) イギリスの政治思想と明治期日本の国際認識の関係

研修中にジョン・スチュアート・ミルの政治思想を深く学ぶ機会があったことで、ミルから大きな感化を受けていたと思われる西周の思想を同時に再考する機会を得た。特に、ミルの文明国標準についての考え方を受け入れていたと思われる西周と、フランス流の人権思想に影響を受けていた福沢諭吉の思想を比較検討するのは興味深いテーマである。西が、ライデン大学に留学した際にパワーの絶頂にあったイギリスの政治思想の影響を強く受け、日本の近代化に貢献したことについては、オックスフォード国際関係研究会で発表する機会があり、多くの学者や学生から有用なコメントや質問をいただいた。その

内容を 2025 年度中に論文の形にする予定である。

また、2013 年に出版した *Logic of Conformity: Japan's Entry into International Society* を『適応の論理：19 世紀日本の国際社会参入』（仮）として日本語で著す際に、今回収集した資料を用いて加筆修正したいと考えている。

3) ケネス・ウォルツの国際政治思想

構造主義のリアリズムを打ち立てたウォルツが大学の講義で文献リストに加えていた社会科学の方法論や国際政治思想を洗い直しながら、昨年出版された Paul Viotti 氏によるウォルツの伝記 *Kenneth Waltz: An Intellectual Biography* の書評論文を執筆する予定である。

3. その他

オックスフォード大学が、なぜ高い世界大学ランキングを何年も維持し続けているのかが、今回の研修中、最初から最後まで念頭にあった疑問であった。アメリカのアカデミアが厳しい競争社会であるのと比較すると、オックスフォードの研究者は、のんびりゆったり研究生を送っているように見えたからである。オックスフォードの強みはいったい何なのか、学部やカレッジで出会う面々に事あるごとに聞いてみると、返ってくる答えは、いつも「研究者の自由と独立を重んじること」であった。もともと学問が自己充実のためのスコレ（時間的余裕 skhole）がある人間が行うものであったとすれば、研究と教育の両立や社会貢献、業績を増やす義務と責任であくせくしている現代の学者が忘れてしまった本来のアカデミアの伝統がオックスフォードでは脈々と受け継がれているのかもしれない。